

学生インターンシップ受け入れを起点とした 農業経営者間の連携・相互学習機会の創出

事業代表者	宇都宮大学農学部農業経済学科	学科長	大栗行昭
		准教授	原田 淳
事業推進協力者	栃木県農業士会	会 長	坂本安靖
	栃木県農業者懇談会	常務理事	伊藤秀雄

1. 事業の目的・意義

農業を取り巻く国内外の環境が一層厳しくなる中、これからの農業経営者は自らの経営を改善するだけでなく、地域内の他経営との協力・連携関係を構築することが重要になってきた。しかし、日常的な交際の中で他経営の内部に関わる情報を得るのは容易ではない。そこで、経営者間での情報共有や新たな協力・連携関係の構築に向けて、インターンシップ受け入れを起点とした相互学習機会を創出することを企画した。

農業経済学科は授業の一環として「農業インターンシップ」を開講している。この授業は栃木県農業士会（事務局＝栃木県農業者懇談会）の協力を仰ぎ、学生が県内の先進的な農業経営者の生産現場に10日間通い、農作業を体験し経営のあり方を学ぶものである。インターンシップを完了した学生は受け入れ農家の農作業や経営戦略の特徴や改善点などを報告書に作成して発表する。

その発表の場に、学生を受け入れた農業士、次年度に受け入れる予定の農業士および県農業士会役員、県の農政担当者などを招き、情報交換会を実施、農業経営者の連携・相互学習の機会を創出する場とする。

この事業は農業インターンシップと情報交換会を実施する。これにより、農業の現場で豊富な経験に裏付けられた農業観・経営観に触れる機会を持った学生は、学習意欲が向上すると同時に、人間的にも大きく成長することが期待される。一方、経営者は自らの経営を見直すとともに、ふだんは把握することが難しい他経営の情報が得られる。

さらに経営者・農政関係者・学生・教員という異なる立場の関係者による意見交換は、イノベーションを誘発し、地域農業の発展につながる可能性も期待される。

2. 事業内容

(1) 農業インターンシップの実施

農業経済学科は平成19年度から農業インターンシップを開講している。授業で学生は栃木県農業士のもとに10日間通い、農業技術や経営のあり方を学ぶ。

これまで計79名の学生がこの授業を受講してきた（19年度7名、20年度11名、21年度9名、22年度10名、23年度8名、24年度8名、25年度8名、26年度8名、今年度10名）。

農業インターンシップは次のような進め方をとる。前年度のうちに農業経済学科が受講学生を募集し、学生の希望する経営類型などを取りまとめる。その希望に沿って、栃木県農業士会が受け入れ農家を選定する。学生と農家の組み合わせが決定すると、年度末の情報交換会（後述）で両者が対面し、簡単な打ち合わせを行い、10日間の具体的な計画を準備する。新年度に入ると、学生と農家が協議しながら実習を進める（図1）。今年度は、実習の半ばで中間レポートが出た段階で、学科教員が学生とともに受入農業士を訪問し、最終レポートに向けた聞き取り調査のサポートを行った。

学生は毎回、実習日誌を記録して農家の確認を受け、全日程終了後、10日分の実習日誌を含む報告書を提出する。全員分を「最終報告書」として

取りまとめ、情報交換会で配布するほか、口頭発表を行い、質疑に応答する。



図1 実習の様子

(2) 情報交換会の開催

農業インターンシップの関係者が一堂に会して、顔を合わせて交流・意見交換し情報や経験の共有を図ることは、参加者にとって大きなメリットがある。

何よりも、学生にとっては実習経験を振り返り、それを報告書に作成し発表する体験を通じて高い学習効果が得られると同時に、大きな自信を得ることができる。

農業経営者にとっては、学生の報告会に参加することを通じて、自らの経営を見直すとともに、ふだんは把握困難な他経営の情報を得ることができる。特に、学生の派遣先は、地域や経営品目が多岐に渡ることから、情報共有のきっかけとして適している（表1を参照）。

学生と農業経営者だけでなく、大学教員、農業団体・農政関係者や、次年度実習予定学生といった異なる立場の関係者が参加する場で意見交換することは、新たな学習機会を創出することにもなる。このような情報共有と相互学習が相乗効果を発揮すれば、イノベーションが誘発され、今後の

地域農業の発展へとつながる可能性も決して小さくない。

本事業ではこのような好循環の起点となることを目的として、農業インターンシップの情報交換会を開催した。

表1 今年度のインターンシップ受入れ農家

地域	経営品目
宇都宮	水稻、麦、そば、しいたけ
宇都宮	水稻、麦、大豆、作業委託
宇都宮	いちご、水稻
宇都宮	なし、水稻
宇都宮	ゆり、水稻
宇都宮	酪農
芳賀	水稻、麦、大豆、作業委託
高根沢	水稻、麦、大豆
さくら	温泉なす、水稻、麦
鹿沼	なし、りんご、水稻

3. 事業の進捗状況

平成27年2月の前年度報告会で、10名の実習予定学生と受け入れ農業士が対面した。27年度に入って農業インターンシップが始まり、これと連動して年度末の情報交換会を準備した（表2）。

2月	受講学生と受入れ農家の対面
4~1月	インターンシップ実施
11月	インターンシップ事務打合せ ・平成27年度実施状況確認 ・平成28年度希望学生受入れ調整
2月上旬	レポートの提出、報告集の作成
2月17日	農業インターンシップ情報交換会

表2 今年度事業のスケジュール

2月17日に27年度の報告会と28年度の対面式を兼ねて、農業インターンシップ情報交換会を本学で開催した。交換会の内容は表3のとおりである。

当日の参加者は、受け入れ農業士 15 名、関係機関（栃木県農業士会、栃木県農業者懇談会）4 名、27 年度実習生 10 名、28 年度実習予定者 9 名および教員 9 名、計 47 名であった。

まず、27 年度実習生が実習（農作業）の様子や受け入れ農家の経営戦略の特徴などを整理し発表した。当日は報告書とは別に、パワーポイントの資料を作成し、1 人 10 分の発表を行った（図 2～図 5）。各実習生の報告後に、受け入れ農家がコメントし、その後、他の参加者も含めた質疑応答を行った。

宇都宮大学と栃木県農業士会の情報交換会

日時：平成 28 年 2 月 17 日（水）

15 時 00 分～17 時 00 分

場所：宇都宮大学峰キャンパス 2C12 教室

1. 開会
2. 学科長あいさつ
3. 情報交換会
 - (1) 平成 27 年度農業インターンシップ報告会
 - 実習生 10 名の発表
 - 受け入れ農業士の方からコメント
 - (2) 平成 28 年度 農業インターンシップ参加者と農業士との顔合わせ
 - (3) 総合討論
 - 農業インターンシップ全体に関して
4. 農業士会会長あいさつ
5. 閉会

表 3 平成 27 年度情報交換会のスケジュール

総括

- 農業には3種類の『気』があると考える！
- 1.根気・・・摘花、葉取りの作業は毎日行う。
- 2.天気・・・ナスの色、ツヤに日照が大きく関わる。
- 3.男気・・・施肥、灌水、経営に一切の妥協を許さない姿勢。

↓
「おいしい温泉ナスの源」

図 2 実習生のパワーポイント資料から

ふるさと農業との違う点

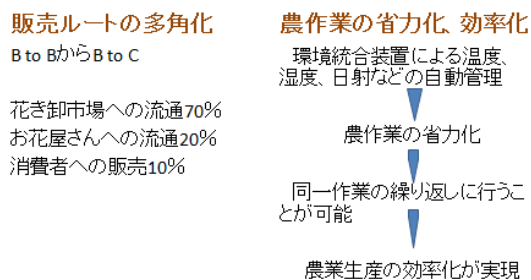


図 3 実習生のパワーポイント資料から



図 4 実習生のパワーポイント資料から



図 5 報告にコメントする農業士

実習生の発表とコメント、質疑応答の後、平成 28 年度の実習予定学生と受け入れ農家の対面式を行った。27 年度実習生の報告を聞いた直後ということもあって、初めての顔合わせであるにもかかわらず、和やかな雰囲気の下、活発な交流・意見交換が実施できた。

最後に、農業インターンシップの今後の進め方や、その他の方面への活用方法などに関する意見交換を行い、閉会した。その後、場所を変更し、懇親会も行った。

4. 事業の成果

農業インターンシップは平成19年度から行われ、学生の報告書は、現場での経験を通じて彼らが大いに刺激を受け、農業への関心・意欲を強め、また人間的も大きく成長したことを示していた。学生の態度は、受入農家から好意的な、高い評価を得てきた。

一方、情報交換会は始まって5年目である。農家・関連機関・学生・教員が一堂に会して学習・交流するという取組みは、関係者の農業インターンシップに関わる意識を高めている。

学生は実習体験を発表し、受入農家はこれにコメントする。これにより、両者が実習体験を振り返って見直す、貴重な体験ができる。また、ほかの経営に関する発表も聴くことを通じて、自らの経験や経営を相対化する契機となっている。

発表の場に後輩が同席することは、いい緊張感を生み出している。学生は実習後に発表会があるのを意識することで、毎回の実習に臨む意識が高まる。また、前年度の情報交換会や過去の報告書を踏まえて自分の報告内容を作成するため、学生の発表内容は、年々踏み込んだものになっているようである。

次年度実習予定学生にとっては、報告を聴き、実習が始まる前に受入れ農家や先輩に質問をし、アドバイスを得る機会があることで、実習前の疑問や不安を解消できる。また、実習に臨む前の素朴な疑問・意見は、農業経営者にとっても新鮮な視点を提供することになる。

教員にとっても、ふだん大学で目にするのではない学生の新たな一面を見いだすことにつながるとともに、地元で活躍している農業経営者の経営戦略や考え方を深く知るきっかけになる。

農業経営者にとっては、学生や教員の発言を聴くことが教員らの教育・研究内容などを知る契機になっている。多くの受入れ農家は、インターンシップを繰り返し受け入れて下さっているが、同じ経営を見ても学生によって興味の対象が異なるため、毎年情報交換会に参加することにより、新たな発見があるようだ。

情報交換会が大学と農業者との距離を縮めるきっかけとなっているのは、非常に喜ばしいことである。

5. 今後の展望

当学科には、将来就農したいと考えている学生が少なからず在籍している。それ以外の学生の中にも、農業経営や地域活動に興味があり、農業インターンシップの受講を希望する学生は一定数存在する。そのため、本事業は今後も継続していく予定である。栃木県農業士会との協力の下、常に改善を加えながら、学生、教員、受入れ農家の三者にとって有意義な事業を展開していきたい。